



## ✿ カンボジアプロジェクトの現状 西トップ遺跡の調査と修復

奈良文化財研究所では2002年より、カンボジアのアンコール・トム内に位置する西トップ遺跡で調査をおこなってきました。西トップ遺跡は東面する3祠堂構成の遺跡で、東前面には低いテラスが付属します。これまでの調査によって14世紀を中心とした時期に、相次いで砂岩製の基壇と祠堂が建てられたことがわかっています。その後、2012年に南祠堂の解体から修復を始め、2020年の完成に向けて作業はいよいよ佳境に入ってきました。南祠堂は2016年に一応の完成をみて、そのあとしばらく細かな手直しを続けながら、北祠堂の解体に入りました。

北祠堂は南祠堂に比べ崩壊が激しく、まず全体の3D測量をおこなってから、手測りの図面を作成しつつ解体をおこないました。最下段の石材をはずす工程で、基壇中央部にレンガを組み合わせた縦横約2m、深さ1.6mの遺構が発見されました。火を受けた金属片や骨片等が出土したことから火葬儀礼をおこなった遺構と推定しました。その後、再構築を続け2017年12月にほぼ再構築を終え、屋蓋部の破風の復元を続けながら中央祠堂の解体に着手しました。

中央祠堂は崩壊防止のため足場材で補強をおこ



中央祠堂 上成基壇外装砂岩の解体(南東から)

なっていたため、各段の図面と写真を撮りながら足場の解体とともに石材をはずしていく工程となりました。中央祠堂は現存で約8mの高さがあり、上から屋蓋部、躯体部、基壇部の3部構成で作られています。屋蓋部はせり出しアーチ構造で構成される屋根が幾重にも重なる構造ですが、躯体部の西北隅を中心に崩壊が進んでおり、かろうじて東面と南面が残るだけでした。解体と並行して仮組を進めた結果、第1破風から第5破風まで、如来座像を主尊とする破風が上下に連なる高い尖塔形式に復元されることがわかってきました。

現在は左の全体写真にみるように、中央祠堂は躯体部が解体され、基壇部の実測調査と解体に着手しています。外側にみえている砂岩の基壇外装の内側には、前身建物にともなうラテライト積み基壇が存在しており、11月中旬には写真右にみるようにラテライト積み基壇の南西コーナー部があきらかになりました。

今後はこのラテライト積み基壇の調査をおこなった後に、下成基壇南西隅から基壇の再構築を進めていく予定です。来年2019年の年末頃までには、躯体部まで再構築を終え、往時の姿を取り戻す予定です。その後、周辺整備をおこない、2020年度末の事業終了を目指しています。

(企画調整部 杉山 洋・佐藤 由似)



中央祠堂前身ラテライト基壇 建築班調査風景(西から)